

◆「ふるさとを捨てなきゃならん」◆

7月16日、伊万里市民へのチラシ・ポスティングを、原発から一番近い市最北部の波多津地区から始めました。

今日は7人で、3つの地区を手分けしてまわりました。住宅がわりとかたまっている所、山道を登って1、2軒、また下って数軒...という所、まちまちでしたが、あわせて400枚ほどを配布してきました。

行動中は雨に降られず、曇りがちであったため猛暑にもならなかったので、夏のポスティングとしては無理なくできました。

車を止めた港に隣接する「ふれあい広場」。海の見ええる山の向こう12キロほどのところに玄海原発があります。原発は見えませんが、その場に立って、3.11福島原発事故のことをちょっと想像しただけで、ぞっとしてしまいます。

再稼働反対を表明した塚部市長の出身地でもあります。市長の思いの根っこが分かった気がしました。

海水を2日間煮詰めて天然の塩を製造し販売している釜を広場で見せていただきました。職人さんは「事故になったら全部だめになる...」と、とても心配されていました。(塩を味見させてもらって、まるやかでおいしかったので、つい買ってしまいました(〃))

♥「うちらも応援してるよ!!」♥

博多駅7:17分発かもめに揺られて佐賀駅着8時。今にも降り出しそうな空の下、車2台で伊万里に向かう。途中降り出した雨も現地に着くころにはウソのよう。太陽がキラキラと照りつける!

前日までに佐賀の事務局で用意して貰った資料と地図。波多津地区の地図を確認して避難チラシと会のパンフ『そいぎ』を各自100部ずつ受け取る。

「ふれあい広場」で出会ったおじさん、おばさんとはばらく話す。誰も私たちのことを好意的に迎え話を熱心に聞いてくれた。

私:「福岡・佐賀の仲間と来ました。今日は福島からの仲間も一緒です」「市長の素晴らしい発言、是非みんなで支えて行きたいですね。私たちも応援しています」避難のチラシを見ながら少し説明するとだんだんと顔が険しく暗くなった。「ここは武雄に避難することになっちゃうさ」「もうそんなときや死んでもよか〜」

ポスティングしながら出会ったおばあちゃん二人。「あぁ〜市長さん、頑張ったもんなあ〜」「うちらも応援してるよ!」「そのうち(家)にも(チラシ)入れてやって」とチラシを催促された。「これはうちが貰ったんから...」とチラシを読み始めてくれた。

かわいいマルチーズ犬と戯れるおじさんを見つけてそばに寄って行って少し話し込んだ。「かわいいですね〜。こんなかわいい



在宅されていた男性に聞きました。「事故が起きたらどこへ避難することになっているかご存知ですか?」「武雄やろ?」「(チラシを見せながら)すぐに逃げられますか?」「逃げられん。計画はあっても実際はね〜」

ゲートボール休憩中のおじちゃん達、販売所に農産物を持ってきておしゃべりしてるおばちゃん達も口々に

「原発は事故が起きれば永久に帰ってこれん」「ふるさとを捨てなきゃならん」「原発は止めておかないと」などと話されました。

玄海町でのポスティングでは、怖い気持ちを押し殺しているような方、まわりを気にして声を出せない感じの方が多かった(中には完全拒否する方も)のですが、伊万里ではチラシを見入って、まっすぐ話を聞いてくれる方が多かったようです。

「市長を応援せんば」という声も多く聞きました。「いい話をしてくれてありがとう」「何かある時は協力するよ」と言ってくれる方も。チラシを何枚も預かってくれたり、店先においてくれたりする方もいました。

伊万里市民とふれあう中で、今後につながる力をいただいた一日となりました。(永野浩二)

ペットを置いたまま避難した福島の話も聞きますよね」おじいさんは頷きながら愛犬をナデナデしていた。

屋根に上って作業している男性二人にも「こんにちは〜! 暑いですね〜」

「玄海原発の再稼働に反対してるんです。市長をみんなで支えましょう!。これ、あとで読んでくださいね〜」「よし!そこそこ置いていてや〜」と屋根の上から声が聞こえる。

車で走りだそうとしている女性のそばに駆け寄って話した。お友達の方もどうぞと3部チラシを差し出すと「貰っていいとね、ありがとう!」

「ま〜福岡からね?これ今そこで貰ったんやけどどうぞ!」とおまんじゅうを頂く。

さらにポスティング続行!玄関の呼び鈴を鳴らしてみると中から初老の男性が...

「こんにちは〜」嫌な顔もせず熱心に話を聞いてくれた。市長の方針に一抹の不安もあるらしい。、市議会でも脱原発派のM議員を昔から応援しています。話題が福島の帰還政策のことになると

「この国の官僚や議員らの半分でも福島で暮らしてみろ!と言いたい!」「自分も出来ることは応援したい」。時間も忘れて長く話し込んでしまった。

「突然なのいろいろありがとうございました!」という「ちょっと待って」と奥に...「汗を拭くのに使いなさい」と冷たい紙おしぼりをくださった。

仲間からの着信履歴が3回も?ひや〜もうこんな時間?汗が一気に噴き出した。(小林榮子)

安定ヨウ素剤事前配布を!自治体への要請行動

〜放射能の危険性を知らせ、「原発いらない!」の世論を高めていくために〜

「安定ヨウ素剤の全ての住民への事前配布を求める要請書(首長宛)・陳情書(議会宛/一部請願)」を、佐賀県内全20市町と、玄海原発から30km圏内にある福岡県糸島市とその避難先16市町に対して提出しようと、8月5日から各市町を訪ねてまわり、ほぼ終えました。

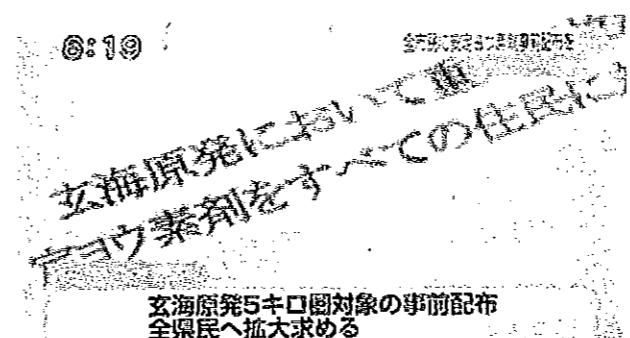
各市町で町長、副町長、議長、副議長、部長、課長、担当者らと、自治体の施策としてできる具体的な話をじっくりとすることができました。

佐賀市、鹿島市、白石町、吉野ヶ里町、鳥栖市、唐津市、玄海町、武雄市では、それぞれの市町の住民とともに要請ができました。

また、嬉野市、白石町、小城市、多久市、大野城市、太宰府市などではこれまで連携してきた議員にも同行していただきました。最初に要請した佐賀市では、白倉和子議員が今度の9月議会の一般質問でヨウ素剤問題を昨年12月議会に続いてさらに具体的に質問して下さることです。

メディアも好意的に取り上げてくれ、万が一の時の「最低限の備え」としての安定ヨウ素剤事前配布に向けて、種を撒くことができたと感じています。そして、このことを通じて、原発と放射能の危険性を自治体と住民に常に認識してもらい、こんな大変な準備までしなければいけない原発などそもそもいらない!という世論を醸成するための、大事な一歩になったと思っています。

玄海再稼働が目前に迫っています。市民・行政が一体となって「原発避難」と正面から向き合い、ヨウ素剤の事前配布までこぎつけた篠山市に続く自治体を、玄海周辺でつくっていきましょう!



玄海原発5キロ圏対象の事前配布 全県民へ拡大求める

- 上 8月5日 佐賀市要請・陳情(サガテレビ報道)
- 下左 同19日 糸島市要請・陳情(RKBテレビ報道)
- 下中 同5日 佐賀市要請・陳情
- 下右 同17日 吉野ヶ里町要請・陳情。町長本人へ身乗り出して説明する石丸代表



※ 要請行動を終えて ※

今回、各市町で地元住民や議員の方々の参加もお願いし、いろんな立場の方からの意見も届けられて有意義な要請行動になりました。

私たちは、自治体とのやりとりは抗議や交渉の場ではないと思っています。「自治体は、特に災害時には住民の対応に追われる立場にあると思う。原発事故は、反対の人も賛成の人も差別なく放射能被害を受けるので、住民として一緒にできる事を考えたい」と今日は伺いました」と話しています。

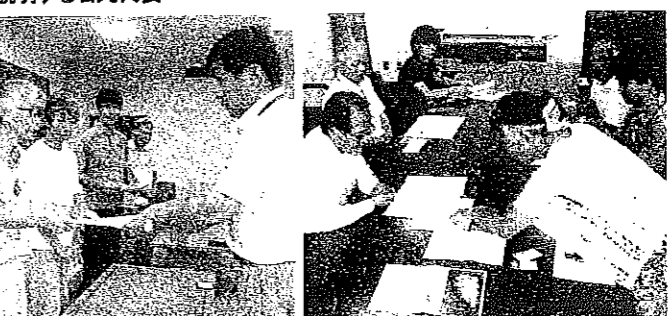
佐賀の自治体は、ほとんど3.11前からの関係もあり、警戒心もなく和やかな会話が終始「また情報を持って伺いますので」と次につなげて帰ります。しかし、玄海町の隣にある唐津市だけはガードが固く、佐賀県や九電に似た緊張感での対応でした。福岡では、同じく30km圏内の糸島市も同じでした。部屋がないとか、事前アポイントをとっているのに「今知った」と言って通路での受け取りになるなど、話し合いをなるべく持ちたくないという姿勢でした。

しかし、唐津も糸島も同市の仲間が一緒だったので、「地元の者ですが...」と言うと態度が変わり、椅子のある部屋にだけは通してくれました。

安定ヨウ素剤事前配布を実行した兵庫県篠山市の話は、どこも興味深く聞いてくれます。また、見本のヨウ素剤を見せると、ほとんどの方は「初めて見ました。値段はいくらですか?」「錠5.6円ですよ」と言う。「何錠飲めばいいの?」と今まで口数少なかった職員の方も興味深そうに会話を始められます。事故が起きれば、職員にもご家族がいるのに自治体は真っ先に、そして最後まで動かねばならないこと、原発事故は電力会社も国も誰も責任は取っていないことはフクシマで明らかだと話す、皆さんうなずいておられました。しかし、原発事故と自然災害の決定的な違いは放射能の被害だということの情報が行き届いていないと感じました。

連日35-38度の猛暑の中でしたが、ほとんどの皆さんから、「暑い中ご苦勞さまですね、大切なことをしてもらっていますね」と私たちの運動に理解を示していただきました。これからも自治体周りと戸別訪問、座談会と裁判闘争と並行して一人一人に伝えていこうと思います。(石丸初美)

<佐賀市陳情書を次頁に掲載>



玄海原発事故への備えとして 安定ヨウ素剤の市民への事前配布を求める陳情書 2016年8月5日 佐賀市議会議員 福井章司様

3.11東京電力福島第一原発事故は、大量の放射性物質を撒き散らし、住民の命や暮らしに甚大な被害をもたらしました。避難が大混乱する中、多くの住民が無用な被ばくを強いられました。

チェルノブイリ原発事故後のウクライナやベラルーシにおいては様々な健康障害が報告されていますが、その1つに甲状腺がんの発病の増大があります。放射性ヨウ素が体内に吸収され甲状腺に蓄積したことが理由と考えられています。

福島においては事故時18才以下だった県民約38万人のうち166人がこれまでに甲状腺がんを発症しました(福島県民健康調査報告、2016年2月公表)。甲状腺がんの発症率は「100万人に2~3人」と言われていたのに対し、異常に高い数値です。このような苦しみを絶対に押し付けてはなりません。

数多ある核種のうち唯一、放射性ヨウ素だけは安定ヨウ素剤を服用することで体内への取り込みを阻止し、甲状腺を守ることができます。

放射性ヨウ素が取り込まれる24時間前から直前までに飲めば阻止効果が90%、取り込まれた2時間後までなら80%、8時間後なら40%と下がり、16時間以降ではほとんど効果がないとされています。効果は24時間前後しかなく、そのタイミングを住民はどうやって知ることができるでしょうか。住民が手元に持って、放射能到達前に「危ない」と思ったらただちに飲める体制を整えておかねばなりません。

福島原発事故では、放射性物質の飛散は250キロ圏にまで及んだにも関わらず、安定ヨウ素剤を配布し住民に服用させた自治体は三春町ただ1つでした。

- なぜ配布・服用されなかったのか。理由は――
- ・事故前に住民に事前配布されていなかったこと。
- ・国の指示が市町村長に届かなかったこと(FAXが混乱の中で埋もれてしまった)。
- ・国の指示がない場合、福島県知事が服用指示を出せるのに出さなかったこと。
- ・国・県の指示を待たずとも市町村長の独自判断もできたはずなのに副作用を恐れるなどで服用指示を出さなかったこと
- ――などが挙げられます。

この経験に学ぶとするなら、まず自治体自身が放射性物質の危険性とヨウ素剤の効能を正しく認識し、住民の命を守る防御策の1つとして、安定ヨウ素剤を事前配布することが求められます。

また、副作用はどの予防接種より少なく、発生率は0.0001%、インフルエンザの予防接種と比べても

20分の1で安全と言われていますが、こうした正しい知識も周知徹底する必要があります。

しかし、現在の玄海原発避難計画では安定ヨウ素剤が事前配布されているのは原発5キロ圏の住民だけです。5~30キロ圏内には役所・支所や公民館などに備蓄はされているものの、避難指示が出される際に、自治体職員が配布することになっています。30キロ圏外の本市においては、配布も備蓄もされていません。5キロ圏外においては、放射能が毎時20マイクロシーベルトを超えると「1週間以内に避難」、毎時500マイクロシーベルト超で「ただちに避難」と国から指示が出されることになっていますが、20マイクロは通常時の0.05マイクロ/時程度の400倍、500マイクロ/時は1万倍という高線量です。実測値で高線量の放射能に襲われてからの避難となるのです。

そうなるからヨウ素剤を配布してもとても間に合いません。ましてや、熊本地震のように道路網が寸断されるような事態の中での配布は困難を極めます。

また、甲状腺被ばくの影響は特に乳幼児が大きいと言われています。国は3歳未満の乳幼児用にゼリー状のヨウ素剤を本年9月から30キロ圏内の自治体への配備を始め、30キロ圏外の自治体でも希望があれば来年度以降に配備を検討するということが求められます。

福井県の高浜原発などから50キロの距離にある兵庫篠山市では、市民の粘り強い活動と市長のリーダーシップにより、希望する市民全員に安定ヨウ素剤の事前配布を実施しています。行政にできることと住民に任せることを、住民に丁寧に説明し、住民の命を守ろうとしているのです。

自治体には住民の命を守る責務があります。原発が近くに存在する以上、放射能の危険性を住民に正しく知らせた上で、最低限の備えをする必要があります。

以上に基づき、下記陳情いたします。

記

玄海原発において重大事故が起きた時に、放射性物質から住民の命を守る最低限の備えとして、安定ヨウ素剤をすべての住民に対して事前配布できるように、国、県、市に働きかけること。 以上

鹿児島県知事、九電に川内原発停止要請 知事には県民の命を守る責務がある

佐賀県知事も熊本地震を踏まえ避難計画の全面的見直しを！ 県民の命を守れないなら、再稼働に同意してはならない！

●鹿児島県知事、九電へ申し入れ

8月26日、三反園訓・新鹿児島県知事は選挙戦での公約に基づき、九州電力に対して、川内原発を直ちに停止させたいと、安全性を再検証するよう要請しました。知事就任以来、「熊本地震により、県民は原発の運転を不安に思っている。県民の不安に応えるのがトップの役割」と繰り返し述べてきました。知事には原子力災害対策特別措置法などに定められているとおり、県民の「生命、身体及び財産を災害から保護する」責務があり、県民の命を預かる知事として、道義的にも法的にも当然の行動だと思います。

他にも滋賀県の三日月大造知事が国への「熊本地震を踏まえた政策提案」の中で「屋内退避」の見直しを求めるなど、県民の命を守る立場からの動きがありました。

●「しっかり注視する」だけの佐賀県知事

一方で、玄海原発の地元、山口祥義・佐賀県知事は7月20日の定例記者会見で以下のように述べています。「私も熊本地震は九州の地震でもあるので、気にしていたのですが、これに対して、原子力規制委員会の田中委員長は、熊本地震を受けて施設の点検をしないでいいのかということに関して、十分に安全審査をやっていますし、これから鹿児島島のほうでも焦点になっていくと思いますので、しっかりと注視していくことになります。」「断層は本当にどこにあるかを100%わかっているわけではなく、だから、どんな断層が真下にあってもある程度対応できるという視点での精査が必要かなと思いますけれども、そういったことも含めて規制委員会が審査をしていただいておりますので、注視していくことだと思っています。」「(熊本地震を)気にしているが、「十分に審査している国の状況をしっかり注視」するだけで、能動的な取り組みは何もしていないのです。

●避難計画の見直しを求めて知事に要請

県「見直していない。国から言われて、必要であれば検討したい」

そこで私達は7月29日、佐賀県知事に対して要請質問書を提出してきました。(右記)

以下、県の担当者とのやりとりです。

県「今のところ、見直していない。国でも見直しをやっているだろうから、必要であれば見直しを検討したい」

私達「今まで通りで、特に何もしていないということが分かった。しかし、熊本地震が起きたのに、どうしてまったく対応しないのが分からない!」

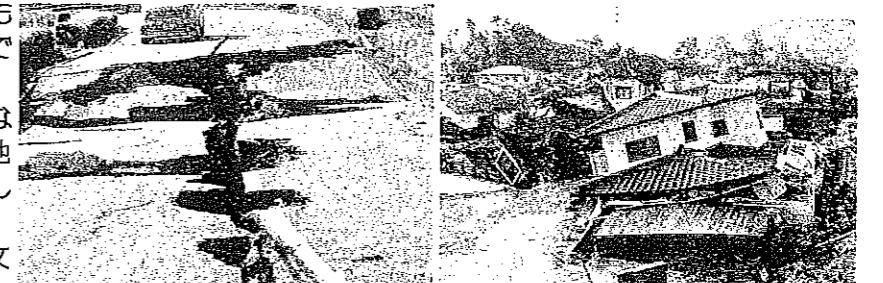
県「そういう言われ方をしても困る。文書で回答するといっているのだから」と

佐賀県知事に対する要請質問書(要旨)

- ・地震に原発事故が重なれば、道路の寸断により避難もできず、建物倒壊の危険から「屋内退避」もできなくなることが熊本地震で明らかになった。地震と事故が起きてからの安定ヨウ素剤の配布も不可能。
- ・佐賀県地域防災計画(地震津波編)では被害想定の基本的考え方として「あらゆる可能性を考慮して起こり得る最大クラスの地震・津波を想定する」とし、震度7の大地震が起きた時の被害想定を複数のケースを具体的に記述している。建物被害や人的被害、ライフラインの停止割合、経済被害なども詳細に記している。たとえば「佐賀平野北縁断層帯」でマグニチュード7.5(最大震度7)の地震が起きた場合、最悪で死者4300人という想定がされている。
- ・しかし、「佐賀県地域防災計画(原子力災害対策編)」では「被害想定」についての記述は、「県は、原子力災害に関し必要な対策を講じるため、原子力災害の特性を把握し、国の指導、助言及び原子力事業者の支援を得ながら災害想定の見直しに努める」という2行だけで、具体的な記述がない。地震などとの複合災害についてももちろん記載はない。

- ①熊本地震の教訓を踏まえて、玄海原発事故時の避難計画を全面的に見直すこと。
- ②全県民に安定ヨウ素剤を事前配布すること。
- ③被害者となる地域住民の不安の声を無視し続ける九州電力に対して、県民を代表して「震度7クラスの連続地震も想定して玄海原発の施設や配管を総点検すること」と「基準地震動が過小評価だと島崎氏の提言も踏まえて、基準地震動の評価をやり直し対策を講じること」を求めること。
- ④県民の命の絶対安全が確認されない限り、再稼働を認めないこと。

聞き直りました。私達「問題は放射能。命と生活が奪われる。だから、こうやって声をあげている。不安な気持ちを受け止めてほしい。知事に私たちの声を伝え、迅速な対応をお願いしたい」



熊本地震による道路地割れ、家屋の倒壊 Photo by 山本宗博

知事は前回の私達の質問に対して、「原子力災害は想定外の事象が起こった場合に発生するものであり、最悪の想定について具体的な想定ができるものではない」と回答されました。「想定外ではすまされない」ということが3.11の甚大な犠牲から学ぶべき教訓だったことを、忘れ去ってしまったのでしょうか。熊本地震が起きてしまってもなお、複合災害を想定外とするのでしょうか。

●山口知事の回答期間は3~4か月!

山口知事が就任してから1年半。この期間、知事に4回質問しましたが、回答までに3~4か月もかかっています。古川康前知事時代でも回答期間は「1か月以内」でした。「県民に寄り添う」との知事のスローガンと裏腹な実態です。ズルズル後回しにさて、再稼働してから回答されても困るのです。こうしたことから「文書回答の迅速化と話し合いの場を求める」要請書も提出しました。

急加速する玄海再稼働 地元同意が焦点に

「佐賀のことは佐賀で決める」はどこへ? 知事には県民の命を守る重大な職責がある

6月28日の九州電力株主総会で瓜生道明社長は、玄海原発を「今年度中に再稼働させたい」と明言。

原子力規制委員会は歩調を合わせるかのよう、8月18日の審査会合で「玄海の課題確認を終了」としました。9月2日の現地調査を経て、今月中にも「審査書案」(＝合格証)作成、1か月のパブコメを経て「審査書決定」、工事計画認可、保安規定認可…と、再稼働反対の民意を無視して手続きをどんどん進めようとしています。こうした中、「地元同意」が焦点になってきます。

再稼働の権限を握るのは玄海町長と佐賀県知事だけ。ひとたび事故が起きたら被害は玄海町や佐賀県だけでなくとどまらず広範囲に広がるわけですから、地元同意(不同意もありうる)の範囲を広げるべきです。佐賀新聞アンケート(3月21日)では、県内20市町のうち「立地自治体だけ」でよい首長は玄海町と有田町の2町だけ。他は「30キロ圏」「県内全市町」への拡大を求めました。嬉野市は「県内全市町に加えて長崎県側との協議」も求めました。これらの当然の声に対して、山口知事は「同意権は国が決める」と答えました。

伊万里市長が「再稼働反対の意志を知事に伝える」と発言したことに対して「意味が分からない」と切って捨てました。

原子力規制のトップ自ら「審査に合格したからといって、安全だとは申し上げない」と言っています。緩すぎる審査基準に対して、伊万里市長は「規制委の判断も

疑ってかかるべき。自治体トップはもう少し勉強すべき」(6月23日、市議会答弁)と喝破しました。

一方で、知事は「安全・安心の観点から規制委員会の審査の状況を見守っていく。私は規制委員会を信じているけれども、それでも常にチェックをかけていくという観点と、県民の意見、県議会の議論も見据えていくということ」を踏まえ、その両点がオーケーなら、再稼働に向けて私は方向性としては出している(7月20日会見)。

鹿児島県知事が「原子力問題検討委員会」設置を表明。全国立地県で独自の原発検討組織がないのは佐賀県だけになります。就任以来、独自の検討を何もしてきておらず、私達の質問に対しても、議会答弁でもお決まりの言葉だけ。どこでどう判断するのでしょうか。国策追従にしか見えません。

「佐賀のことは佐賀で決める」のスローガンはどこへ? 知事には県民の命を守る重大な職責があります。

◆福島原発事故は終わっていません。福島の検証なくして新しい基準などつくれません。

◆避難計画では命とふるさとを守れません。犠牲にしないでください。

◆核のゴミを、これ以上増やしてはなりません。

原発は経済の問題でも、エネルギーの問題でもなく、命の問題です。

「原発いらない!」とまっすぐに訴えていきましょう!

覚悟あらたに ~提訴6周年年次活動報告会~

2010年8月9日、原告130人で九州電力を相手に玄海原発3号機MOX燃料使用差止を提訴してから6年を迎えました。3.11をはさみ、私達は4つの裁判を、MOX控訴人98人、仮処分債権者90人、全基原告176人、行政訴訟原告382人の合計746人の原告と、支える会・サポート会員871人の合わせて1617人の仲間と闘ってきました。原告、支援者のみなさんに対する活動報告の場として、本年も7月2日に「提訴6周年・年次活動報告会」を福岡市ふくふくプラザにて開催しました。

◆開会にあたり石丸初美代表は

「2006年2月、古川康前佐賀県知事がブルサーマル安全宣言をした時から、市民が新たに立ち上がり、県民投票や様々な運動をやってきました。裁判までを起すことになったが、私たちは生活を守る運動、子育ての延長という気持ちでやっている。

MOX控訴審で不当判決が下された。3.11の犠牲を無視し、国策に追従した高裁の姿勢を絶対に許すことはできない。命のことだから、私達はあきらめない。

支援者の皆様、弁護団の皆様、裁判補佐人の小山さんの大きな後押しがあって、今日まで歩いて来ることができたことに、心より感謝申し上げます。これからもご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。」と挨拶しました。

◆次に、事務局から、この1年の裁判と法廷外の運動についてスライドで駆け足で報告。「一人ひとりに伝える」ことを基本にして、めいっばい動いた1年でした。

会計・監査報告では、裁判運動を続けるには多額の費用がかかること、みなさんからの支援がなければ運動を進めることができないことを確認しました。

◆続いて、弁護団長の冠木克彦弁護士から「画期的2判例と今後の展望」と題してお話いただきました。

大飯原発再稼働を止めた2015年4月14日の福井地裁決定(樋口決定)と、高浜原発再稼働を止めた2016年3月9日の大津地裁決定。

冠木さんは、樋口決定の意義はその「破壊力」にあったとし、「原発訴訟の人権宣言」(澤山保太郎会長の言葉)ともいべき決定だと評価。大津決定は「伊方最高裁判決の曖昧さを払拭し、明確な原発訴訟における立証責任論を宣言。以後の原発訴訟を方向付けた画期的な決定」だと評価しました。

その上で、玄海の裁判で中心的課題となっている耐

震性、基準地震動計算式における「ばらつき」問題を解説しました。9月16日佐賀地裁の「説明」を経て、向こう1年の間に裁判所の結論が出る可能性があり、我々も画期的判決を基にして集中して活動を進めれば、勝利の見込みは充分あると、展望を示されました。

◆続けて、裁判補佐人の小山英之・美浜の会代表から「熊本地震を教訓として原発の耐震性を見直しを」と題してお話いただきました。

・熊本地震のような繰り返し地震による原発事故が起きたら避難計画が成り立たないこと
・政府交渉での国の酷い回答を紹介しながら、繰り返しの揺れが襲えば配管の劣化許容値を超えること
・現行の基準地震動の計算式が過小評価であることを私たちが裁判で主張してきた経緯に触れながら、島崎・元規制委員長代理の警告が大きな意味を持つこと
小山さんは、これらを解説され、「運動として広め、要求していこう」と呼びかけました。

◆講演の後、石丸団長、荒川謙一副団長から

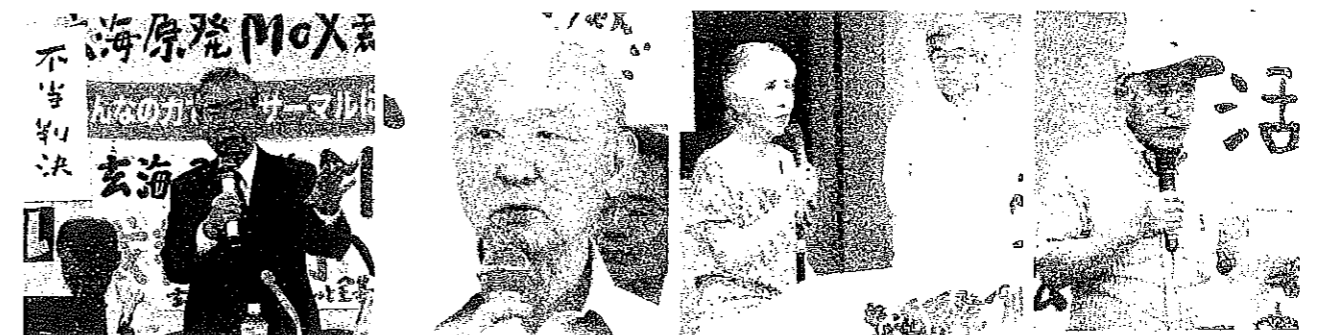
「上告した場合、最高裁は事実審理はせず、憲法違反がないかどうかを調べるだけとなる。商業機密も開示されない中で、これ以上の原告側からの追及は難しい。今の司法のあり方の中で、勝つ見込みは非常に厳しいし、悪しき『最高裁判例』となることも避けたいので、上告はしないこととしたい。玄海原発を止めるために3号機ブルサーマルも含めて、残る3つの裁判での勝利に向けて全力を尽くしていきたい」と提案し、参加者一同から了承を得ました。避難計画に関する取り組み状況も共有しました。

◆締めくくり、澤山保太郎・裁判を支える会会長は「控訴審判決は非常に酷い内容だった。ただ自分達として反省するところもあった。立派な弁護団を抱えながら、それを支えきれなかった。運動の主體的な力が弱かったのだ。県民の意識を変えていくような運動ができているか、僕らに問いかけている。これまで以上の運動を起し、裁判で勝利しよう」と訴えました。

本報告会では、みなさんと想いを共有し、原発を止めるための覚悟を新たにすることができました。今後とも力を合わせて行動していきましょう!

今後ともよろしくお願いいたします。

5月28日以降の活動経過	
■5月	28 裁判ニュース第20号発行
■6月	5 糸島避難経路説明会(深江公民館)
	8 福岡司法記者レク
	10 佐賀県知事署名提出
	24 糸島避難経路説明会(福吉公民館)
	27 福岡高裁MOX不当判決
	28 九電株主総会アピール
■7月	1 佐賀地裁・行政訴訟/全基差止/仮処分
	2 提訴6周年・年次活動報告会
	4 MOX上告断念記者会見
	16 伊万里ポスティング1回目
	20 基準地震動問題共同声明
	23 虹空マルシェ出店 玄海原発対策住民会議総会にて報告
	24 伊万里ポスティング2回目
	26 伊万里ポスティング3回目
	29 避難計画見直し知事要請
30	伊万里ポスティング4回目 福岡「女性会議と座談会」
■8月	5 ヨウ素剤陳情・要請(佐賀市、神埼市)
	6 ピースポート玄海町案内 伊万里ポスティング5回目
	8 菅野みずえさんと語ろう会(佐賀)
	9 菅野みずえさんと語ろう会(糸島・鳥栖)
	10日 菅野みずえさんと語ろう会(伊万里・唐津)
	ヨウ素剤要請(伊万里市)
	12 ヨウ素剤要請(嬉野市・太良町・鹿島市)
	15 ヨウ素剤要請(太宰府市、春日市、須恵町、新宮町、久山町)
	16 ヨウ素剤要請(大野城市、筑紫野市)
	17 ヨウ素剤要請(上峰町、みやき町、吉野ヶ里町、鳥栖市、基山町)
	18 ヨウ素剤要請(唐津市、玄海町)、韓国KBS取材
	19 福岡市議会請願陳述、ヨウ素剤陳情・要請(糸島市)
	20 NUMO地層処分セミナー
	22 ヨウ素剤要請(白石町、武雄市、有田町、大町町、江北町)
	23 ヨウ素剤要請(小城市、多久市)
	24 福岡市民政治ネット玄海ツアー案内
	26 ヨウ素剤要請(志免町、粕屋町、宇美町、徳栗町)
	30 原発いらない九州連絡会議総会にて報告



冠木克彦 弁護団長
小山英之 裁判補佐人
(6月27日 MOX不当判決報告集会)

石丸初美団長 荒川謙一副団長
澤山保太郎会長
(7月2日 年次活動報告会)

菅野みずえさんからの言葉「国は守ってはくれなかった」 ・・・私達は、どう生きのびるか？

北川美和子（福岡市）

『今、みなさんの足元に危機が迫っています。家の前に穴があって、それを知らん顔して、誰かが落ちたら、私も加害者です。そうなりたくないんです。私達が失くしてしまった2011年3月10日に続く明日を、みなさんは今も生きておられます。あなたはわたしになるのをただ待つのですか。"原発がなければ、こっからことにならなかつたべ。"と後悔しますか。そのことに気づいてほしい。』



8月8～10日にかけて、東京電力福島第一原発事故により暮らしのすべてを奪われた、福島県浪江町の菅野みずえさんを囲むお話し会を、佐賀、糸島、鳥栖、伊万里、唐津の5か所で行いました。これが原発事故であり、避難の現実なんだと、つらく、苦しく、悲しいお話をじっくりと伺うことができました。

施設訪問、ポスティング、座談会など、私達が行動する中で繋がった各地の市民も参加し、玄海再稼働迫る中で、避難計画の問題などそれぞれの地で何をしたいかよいかも話し合うことができました。以下、菅野さんのお話の概要を紹介します。

【菅野さんは生活保養施設、知的障がい者の生活施設など福祉の現場で35年働いてきたが、原発事故により福島県内の仮設住宅を経て、家族と兵庫県へ避難。今は浪江の暮らしと同じように日々野菜作りに励む。原発賠償訴訟関西原告でもあり、福井・関西で自治体申し入れなど原発再稼働に反対する活動を続けています。】

《2011年3月11日14時46分 東日本大地震発生》

3分近く揺れた。当時勤務していた大熊町のデイケア参加中の利用者を必死で外の駐車場へ。快適な床暖房とエアコンの効いた室内から薄着、靴下のままの足で、冬の屋外へ。余震の合間に、何とか上着と靴を持って来て身に付けてもらった。次の日は非番だったが、「明日出て来ます。」と言って帰宅した。しかし、避難により職場の人々とそれきりになってしまった無念さが残っている。

帰りの山道は、いつもは45分しかかからないのに3時間もかかった。いつものルートは通れなかった。代わりに教えてもらったアイスバーンと雪崩れ、地割れ、岩の落下、電柱が傾き電線が道にたわむ山道を帰った。地域の人が、「俺の轍(わだち)を外さないように付いて来い。」と先導してくれた。今まであの時が一番運転が上手かったと思う。

《2011年3月12日15時36分 1号機で水素爆発 同18時25分20キ口圏内の避難指示。浪江町には何も知らされず、津波の犠牲者の捜索をしようとしていた5km圏内への立ち入り禁止が警官によって告げられた》

浪江町津島地区の自宅へ、次々と避難者が来て25名となった。その場所は、放射能が非常に高い場所だったが国はSPEEDIのシミュレーション結果を県に知らせたにもかかわらず県は知らせなかった(シミュレーションでは、1号機爆発の2時間前から、放射性物質は津島地区の方向に飛散すると知らせていたのに、政府や福島県はこのことを公開しなかった。)

夕方になり、ハイエースの様な車に乗り、これまで見たことの無いガスマスクに、見たことの無い防護服の男二人が現れ、「頼む！逃げてくれ。」と叫んだ。その夜から翌朝に掛けて来ていた避難者を逃がした。謎の男達に、どうして「データをくれ。」と言わなかったのかと、今でも夢にまで出てきて、悔やまれる。

《仮設や避難後の暮らし》

25人が避難できるような大きな家からコンパネ1枚の狭い仮設へ。隙間から地面が見える。そこから蟻が入ってくる。隣の家のたばこで4畳の部屋の空気が紫になる。これではと家族がシリコンを注入し、隣近所の老人宅も施工して回った。そうやって一冬過ごし、翌冬やつと周りの壁に断熱材が張られた。これは阪神淡路の大震災で法整備された仮設住宅なため、東北の冬は想定されていなかったためである。

2012年1月、愛犬が血を吐き、雪を真っ赤に染めて死んだ。放射能の高い地面を歩き、放射能を浴びた毛皮を身につけていた犬。何の病気も無くウィルスも見つからなかった。劇症型の血小板減少症と診断された。知人宅の犬も同様で医者は、「毒を飲んだ。」と言う。「毒など飲ませはしない。」(飲ませたのは誰?)我が家のわんこはセシウムが届かないように、深い穴を掘って埋めた。が、一人で残してきてしまったと県外へ避難して思う。

自身も、甲状腺ガンになる。医者は、「原発事故のためとは言えない。」と言う。しかし、名前も聞かれなかったのでデータは残っていないが、3時間並んで受けたスクリーニングで10万cpmのガイガーカウンターが振り切れた数値だったというのに。甲状腺がんの検査は、針を喉に刺して行った。痛くないと言われていたが、辛い検査だった。そんな辛い検査を子どもが受けねばならない。<そして、今年夏の発表では172人の子ども達に、甲状腺がんが見つかり134人が手術を受けた。>

《故郷へのいとしさと喪失感》

放射性汚染物の中間仮置き場になっている大熊町の話。「家の子が18歳になったら、自宅を見せて解体撤去了承の判子を押す。」と語る住民。18歳にならないと帰還困難区域には入れないのだ。「一番上の子だけでいい。その子が他の子に語ってくれるだろう。」と続く言葉。二度と戻ることができない故郷への別れの覚悟と、つるいとしさ。そんな時、石原伸晃環境相の「どうせ金目でしょ。」発言があったのだ。「謝ってくれるまで、判子は押さない。」と住民は怒り、悲しむ。

後継ぎとしてもどつてきた自分に、地域の年寄りから

「おらの祝いだ。」とそっと渡された物。それは、10粒の在来種のインゲン豆。そのインゲン豆は、10粒とも元気に双葉を見せた。それは、美味しい豆だった。手本がすぐ傍に在ってそういう優しさを持つ老人に私もあの地で成れるはずだった。<大事な野菜の種を分けてくれた人と心を通わせるみずえさんの話だった。>

3本の糸ヒバの木は、先祖からの贈り物。風が少しでも厳しく当たらないようにと植えた木。今では見上げるほどに育ち、家族を守ってくれる。その木も汚染されてしまった。庭の木々にブランコを掛けて遊ぶことも、もうできない。

通り門を飾る美しかった季節の花々。今では、写真の中でしか見る事ができない。

厳しい寒さを楽しんだ、氷灯ろうの思い出。<この写真を見せながら、思い出にいつか笑顔になったみずえさんだった。>

ずっと向こうの山まで続いた、何代もの先祖が厳しい労働で開いた美しい耕作地。一時帰宅して、1度は柳を伐採した。しかし、放射能に汚染された田畑。今では柳やセイタカアワダチソウ等におおわれているばかり。

「あのときね。」とすべてを話さなくても、分かりあえる関係・馴染の味・他の人のものでない自分の祭り囃子を出す。しかし、祭りの踊り手も、戻っては来ない。

何もかも失った。人はバラバラになって去って行った。元気でいるのかと尋ねることさえできない。

いとしい故郷は、捨てさせられ、荒れ果てた。そして、私は、さまよう。「今までの私はどこに？私は誰？」と問いながら。

《生き延びるために》

①「福島を忘れない。」と言わないで。福島は、終わったのではなくて、始まったばかりなのだから。「福島を思つて。」私はあなたで、あなたは私だから。

②「福島県民をモルモットにするな。」とは、言わないで。モルモット以下の扱いだった私達。モルモットにして、データを取るべきだ。正しいデータを出したら、パニックになるなんてとんでもない。避難するとき、人々は助け合つて逃げたのだから。

③「死の町」と言つて、罷免された議員の鉢呂吉雄氏。ゴーストタウンだということを目撃して欲しい。誰がこうしたかと。

④「放射能で死んだ人は、いない。」の嘘。津波ではなく原発事故のため、助けに行けなくて餓死した人。原発労働者の発病。そして、これからも起きる放射能汚染の結果を、私達は推測できる賢さを持っているはずだ。

⑤終わってもいない原発事故を繰り返してはいけない。玄海原発の再稼働を私達は力を合わせて止めなければならぬ。

文責：北川美和子 ※<>内は北川コメント

玄海原発再稼働反対！全国から"91,388筆"

一人ひとりの思いを佐賀県知事へ直接届けました！ **佐賀8団体共同署名**

6月10日、脱原発社会を目指し活動している佐賀県内8団体(脱原発佐賀ネットワーク)は、山口祥義知事と中倉政義佐賀県議会議長に対して玄海原発の再稼働を認めないことを求める署名を直接面会の上、手渡しました。

全国から集まった署名数は47都道府県から9万1388筆。佐賀県内11203筆、県外で80185筆。

たくさんの方々の思いが込められて、人から人へ、回り回って、知事の目の前に届けられたのです。

私たちは「いつ福島原発事故のような惨事が繰り返されるかわからない。核のごみも未来へのつけまわしになる。放射能被害は人生、ふるさとを根こそぎに奪ってしまう。子ども達の未来のために、再稼働を認めないでほしい。全国からの署名者の意思を重く受け止めてください」と訴えて、署名を知事に手渡しました。知事も「全国？」と驚いたようでした。



91,388筆の署名を手渡される山口知事

5万3859筆もの署名が集まった福岡県から駆けつけた荒川謙一・裁判の会副代表は「福岡県での避難訓練も見学したが、

どう連絡がいき、どう逃げなければならないのか、まったく不十分だった。福島原発事故の解明もされない中で再稼働はあってはなりません」と、500万福岡県民の一人として思いを述べました。

知事は再稼働の是非は触れず、「佐賀だけの問題でなく糸島をはじめ福岡や長崎とも関係するから、改めてその意識を持ちしっかり考えていきたい」と応じました。この知事発言は重要です。佐賀県外からも佐賀県知事にどんどん声を伝えていきましょう。

知事が常々、「原発の安全性は国が判断」「"地元"の範囲を決めるのは国」だと、国策追随の発言を繰り返してきたことを知っている私たちは、

「知事は就任以来"県民党"ということをよく言われるが、原発は佐賀県民のみならず隣接県民の命と安全にも関わること。国待ちではなく、県のことは県民で、私達のことは私達で決めさせてください」と念を押した上で「我々と会って"聞きましたよ"というポーズだけで終わらせないでください」とあえて釘を刺しました。知事はすかさず「ポーズとは思ってない」と応じました。

最後に、ネットワーク世話人の野中宏樹さんは「であれば、なおのこと、中身のことをしっかりと考えていただきたい。9万1388筆というのは一人ひとりなんです。一人ひとりのお母さんや子ども達の想いがここにあるということ、真摯に受け止めていただきたい」と締めくくりました。